家族の思いを引きついで

志学小学校　五年　松尾　柚珠羽

私の家は牛をかっていて、私もずっと手伝いをしています。一番大変な仕事はふんかきです。牛のね床のふんをバンクりという機械に落としゝきれいになったね床に、のこくずというけずりカスをしきます。ふんは重くて、自分の全体重をかけないと機械に落とせません。以前はあまりの大変さに泣いて、仕事をやめてしまうこともありました。今は投げ出す事は無いけれど、それでもやっぱり大変です。とてもつらいふんかきですが、ひいおじいちゃん達の時代はもっと大変でした。今はふんを機械に入れてしまえば自動で運んでくれるけど、昔はねこ車で運んでいました。新しいね床にも、のこくずの代わりにわらを切ってしていました。そんなに変わらない、と思う人もいるかもしれませんが、これは大変さが全くちがいます。しかも、ひいおじいちゃんとひいおばあちゃんはこの仕事を二人

でしていました。たった二人でこんなに大変な仕事をするなんて、と話を聞いた時はびっくりし、二人のすごさに感心しました。

ひいおじいちゃん達は兵庫県出身で、昭和三十二年に牛かいを始めるために志学にやってきました。来た時志学には何もなかったそうです。牛一頭を二万円で買い、牛かいを始めました。戦後の物があまり無かった時代に、せめて自分たち、この国の人たちの食べ物だけは、という気持ちでがんばって働いたそうです。その努力の結果、今では百頭に。牛舎も二回建て増しをして広くなりました。ハ十三才で引退するまでの間に、機械やえさ、牛かいの環境など目まぐるしく変化し、とても便利になった、とも言っていました。

そんな中で私のおばあちゃんが、月日が経って私のお父さんやおばさんが生まれ、家族が増えました。大変な仕事だけど、みんなで助け合いながらがんばって働いたんだと教えてくれました。そして私たちも生まれ、家族

も十人に。もちろん今もみんなで協力しています。私は正直面倒だなと思う時もありました。でも、両親の休けい時間が短くなり、両親の忙しさを感じてから、私も手伝わなければ、と思うようになりました。こうやって牛かいの仕事は引きつがれていく気がします。

私が大人になった時、牛かいはどんなふうに変わっているのだろう。想像もできないような便利な機械等ができて、今よりも楽になっているのかな。牛かいは時代と共に変わってきています。でもきっと働く人たちの思いは変わりません。おいしい牛乳を届けたい、という思いをもって働いていると思います。機械が増えた今ですが、私の家は手作業の仕事もタイです。細かい異変に気付きやすくなるからです。牛の気持ちを分かってあげたいという家族の思いが、手作業に表れていると思います。変わっていくもの、変わらないもの。どちらも大事です。大切なものはずっと残しながら、牛たちを守っていきたいです。